

第三十八回 「全日本中学生水の作文コンクール」 岐阜県優秀作文集

水について考える

主催 水循環政策本部、国土交通省、岐阜県

後援 文部科学省、厚生労働省、農林水産省、

経済産業省、環境省、

独立行政法人水資源機構、

水の週間実行委員会、全日本中学校長会

「全日本中学生水の作文コンクール」について

「全日本中学生水の作文コンクール」は、次代を担う中学生の皆さんに、暮らしの中で体験している水にまつわる話や、祖母、両親、先生から学び聞いた話などをもとに、「水」や「今後の水の使い方」について、考えていただくという趣旨で、「水の週間」の行事の一環として実施しています。

今年も、第三十八回を迎え、岐阜県表彰として最優秀賞一作品及び優秀賞二作品を選定しました。

この三作品について、このたび優秀作文集としてとりまとめました。いずれも中学生の皆さんの真剣な思いが伝わってくる作品です。ぜひ御一読ください。

「第三十八回全日本中学生水の作文コンクール」

一．応募要領 ①テーマ：「水について考える」（題名は自由）

②対象：中学生（中学生と同じ学齢の者を含む）

③原稿：四百字詰め原稿用紙四枚以内で日本語により表記されたもの

④あて先：岐阜県都市建設部水資源課（岐阜県内の応募者）

⑤募集締切日：平成二十八年五月六日（到着分有効）

⑥著作権等：○応募作品は個人作品に限る。

○応募作品の著作権は国土交通省及び岐阜県に帰属する。

○応募作品は返却しない。

二．応募状況 応募学校数 二校 応募総数 一四七作品（一年…三作品、二年…一二作品、三年…一三二作品）

三．審査 応募作品について岐阜県で審査（地方審査）を行い、岐阜県表彰として最優秀賞一作品、優秀賞二作品を

選定。なお、応募のあった五作品は、中央審査対象作文として国土交通省に推薦。

目次

岐阜県最優秀賞

『水と共に生きる』・・・・・・・・・・美濃加茂市立西中学校 三年 福富 千陽

岐阜県優秀賞

『私の使命』・・・・・・・・・・美濃加茂市立西中学校 三年 立川 真央
『水と私達の生活』・・・・・・・・・・大垣市立赤坂中学校 三年 山本 結惟

『水と共に生きる』

美濃加茂市立西中学校

三年 福富 千陽

「水は大事にしなかんよ。」幼い頃よく祖母に言われた言葉だ。祖母の家には古い井戸がある。ポンプで水を汲み出すことが楽しく、理由もなく弟と競い合うように水で遊んでいたからだ。その井戸も、今はもう使われていないが、祖母は毎年、正月になると鏡餅を井戸の蓋の上に置いている。井戸の神様がいると信じられているからだ。

私の住む地域には池が多い。調べてみると、そのほとんどがため池だった。今から数百年も前にここ近辺に住む人々が田畑の水源を確保しようと、長い時間をかけて幾つかのため池を造り上げた。その池、一つ一つに名前があり、神様が祀られ、石碑も建てられている。こうして水は昔から大切にされてきた。

清流の国と呼ばれる水資源の豊かな岐阜でも、かつては人々が水源を求め、手に入れるために苦勞してきたのだ。

ところが今はどうだろう。蛇口をひねるだけで出てくる水、消毒までされた綺麗で飲むことのできる水が、排水溝へ吸い込まれていく。昔の人々が苦勞して手に入れることのできた水も、簡単に手に入れることができ、水の大切さ、ありがたみを忘れてはいないだろうか。もしも、蛇口から出てくる水が汚れていたなら…、蛇口から一滴も水が出てこなくなったら…。想像してほしい。まず今まで通りの生活はできないだろう。人間は水なしでは長くて5日ほどしか生きていられない。私たちが水を必要とすることで、大混乱が起きるのは現実だろう。

私はいつも多くの水を生活の中で使っている。つい最近、水のありがたみを改めて感じさせられる出来事があった。

部活動で残り少ない水筒のお茶を飲み干してしまい、練習中に水道まで行くこともできず、いつもより、のどがカラカラになってしまった。休憩時間になり、ようやく水道に行つて水を飲むことができた。その時の、蛇口をひねり、透き通つた水を手で受けた時の喜び、喉を伝う水の冷たさ、乾いていた体にその冷たい水がしみ込んでいく感覚は、私にとってたまらなく気持ちの良いものだった。

普段手を洗う時や、掃除をする時にサーッと流していた学

校の水道水だ。その水がこんなにも私を潤してくれた。改めて水のありがたみを感じることができた。

水のある地は、憩いの場である。何百年、何千年と守られ続けた水を、その憩いの場を、まだ先の未来に残したい。だから私は、節水や生活排水を減らすなど、水を大切にすることは勿論、池の保全、川辺や海辺の清掃といった、地域の活動にも、積極的に参加しようと考えている。憩いの場を美しくすることで、水の大切さを知るきっかけを創ることができたら嬉しい。そして、より多くの人に知ってもらいたい。

昔から水は、私たちの生活に必要不可欠な存在なのだ。私はその少ない資源である水を、昔の人々が大切にしてきたように、未来に残していきたい。

今日も青々とした田んぼの上を渡ってくる風は夏の暑さを和らげてくれている。

『私の使命』

美濃加茂市立西中学校

三年 立川 真央

蛇口をひねれば水が出てくる。それを当たり前だと思っ
ていないだろうか。いつでも、安全な水を使用できるのは特別
ではないと思っ
ていないだろうか。私は前まで、そんな事は
当たり前で、気にもとめなかった。しかしあるきっかけで、
私の水に対する価値観が変わった。

ある日、私はテレビを見ていた。暇だったから見ていただ
けで何を感じるわけでもなく、画面に映し出される映像をた
だながめていた。

その時、私の目にある映像が飛びこんできた。それは、桶
を持って何キロメートルも歩くアフリカの子供たちの姿だっ
た。私は、なぜかそれに興味をもち、いつのまにかいいい
るように見ていた。そのアフリカの子たちは水をくみに来たの
だった。水をくむだけに何時間もかけなければいけないと知
り、衝撃をうけた。しかし、もっと驚いたのは、その子達が
くんでいる水だ。私だったら、見向きもしない汚い川から水

をくんでいるのだった。私は、その子達をかわいそうだと思
った。また、それと同時にいつでも安全な水を使えるのは、
とても特別で幸せな事だと感じた。

その日の夜、私は両親に世界には水をくむのに長い道のり
を歩かなければならなかったり、やっとの思いで着いた所の
水も安心できるようなものではない国もある、という事を話
した。両親は驚いた顔をしていたが、最後まで話を聞いてく
れた。話しが終わると、水についての話し合いが始まった。

まず unnecessary のに無駄に使ってしまった水はないだろ
うか、という話になった。思いあたる事はたくさんあった。
シャワーを使っ
ていないのに出しっぱなしでいたり、食器を
洗う時に出しっぱなしにしていたり。いつも母に怒られてい
た事だが直そうとしていなかった。しかし、今回は違った。
本気で改めよう、と心に誓った。

また、兄や姉にも知ってもらいたいと思い、家族でルール
を決めた。「必要のない水は使わない」「使用したらすぐに止
める」「出しっぱなしにしない」とてもきさいな事だが、少し
気にかけるだけで良くなることも増えると信じている。たと
え、テレビで見た子達のもとへ自分がガマンした水が届かな
いとしても、何かできることがないかと考え、行動すること

が大切なのではないか。

きっと、何かのきっかけで興味のないあなたの感じ方も変わるだろう。他の皆にも私のように水の大切さを知ってもらいたい。そのために、このような作文などで皆に伝えていくのが私の使命なのではないかと考える。

『水と私達の生活』

大垣市立赤坂中学校

三年 山本 結惟

大垣市は、全国でも有数の自噴帯に位置しており、豊富な地下水の恵みにより、「水の都」と呼ばれてきました。以前は、各家庭で井戸舟を持ち、地下水を活用して生活してきたのですが、現在では、その面影もうすれつつあります。しかし、今でも良質な地下水が自噴している井戸は数多く見られ、最近になって自噴水が復活したところもあるそうです。また、大垣市を代表する夏の和菓子である「水まんじゅう」も有名です。もともと、和菓子処で水の質が良い大垣ならではの水菓子の代表的なものとして、水まんじゅうは江戸末期から庶民に大いに、好まれていたそうです。

水は、料理、洗濯など私達の生活の中では欠かせないものです。しかし、私達は「水はあって当たり前」という考えの

人がほとんどではないでしょうか。震災を経験した人からしてみれば、水を配られる数に限りがあり、家族に一本などとても苦しい生活をしていて、水はとても貴重で簡単に手に入るものではなかったと思います。なので、水は、万が一震災が起こったとき、私達が生きていくためには欠かせないものなのでありがたみを持って水を出しっぱなしにするなど、もったいない事はせず、水を大切に使うってほしいと思いました。

例えば、水がない生活を想像してみてください。お風呂に入れなくて体の清潔を保つことができなくなったり、歯みぎきをして口をゆすがないと菌が口の中に残ってしまいそれを飲み込むことで体の中に菌が入り病気になるってしまうものもあるようです。また、汚物などに触れた不衛生な水を体力の弱い乳幼児や免疫力の弱い老人が飲むと不衛生な水で命を落としやすいことが分かりました。

世界の水の使用量は一九九五年の段階で年間三五・七〇〇億立方メートルで内訳としては、農業用水が約七割を占め、工業用水が約二割、生活用水が約一割だったとも推定されており、水使用量は一九五〇年から一九九五年までで二・六倍にもなっているともされ、二〇二五年には三〇億人以上が水の量と質の限界の水ストレスに直面するとも予想されている

そうです。日本の使用状況の一例として東京の家庭を挙げる
と、一日で一人あたり二四二リットルの水を使っており、(二
〇〇五東京都水道局調べ)家庭での水の使用量のうち二十八
パーセントがトイレ、二十四パーセントが風呂、二十三パー
セントが炊事、十七パーセントが洗濯(二〇〇二年東京都水
道局調べ)となっているそうです。

今回、水について調べてみて、食べ物もそうですが、飲み
水をはじめ、水をなくしては料理などができなくなるなど、
私達の生活は成立していかないということが分かったので、
「水はあって当たり前」という考えをなくし、ありがたみを
持って、水を大切にしていきたいと思いました。